ジョージ・マクドナルドの内的女性像

George MacDonald's Anima

長　田　惠　子
Keiko NAGATA

日本女子大学大学院紀要
家政学研究科・人間生活学研究科
第 24 号

ジョージ・マクドナルドの内的女性像

George MacDonald's Anima

長　田　惠　子*
Keiko NAGATA

Abstract　At the core of numerous fantasy novels by George MacDonald (1824-1905) lies the fairytale post-tribulation union of princesses and their princes. Also appearing are goddess-like entities who aid the protagonist, contrasted by witches who aim to obstruct them. MacDonald's intrinsic image of the female behind such female characters can be examined in terms of Jung's anima and Great Mother; through the lens of the former, this paper investigates the inner female part of MacDonald's personality. The union of reason and emotion is said to be necessary for self-realization. In the 19th century, male reason was deemed supreme, and denied was the notion that female emotions dwelled within men. Through his stories and the roles his female characters played within such, MacDonald aimed to fulfill the growth of such passion within him, fusing male and female attributes to complete his genuine anima and true self with an aim toward self-realization.

Key words:　self–realization　自己実現，anima　アニマ，reason　理性，ego　自我，emotion　感情

はじめに

ジョージ・マクドナルド（George MacDonald, 1824–1905）は，ファンタジー作品の中で，『かるいお姫様』（1864）や『黄金の鍵』（1867）など問題を抱えた王女や女の子が，試練を乗り越えて王子や男の子と結ばれるというおとぎ話を下敷きにした物語を書いている。またその中には女神的なもの，魔女的なものも登場するが，彼女らは主人公を助けるものとして，また試練を与えるものとして機能する。このようにマクドナルドの物語には女性的なイメージが頻繁に現れるが，それはマクドナルドが自分の内側から湧き上がってくる女性的人格要素を彼の物語の中で明るみにもたらそうとするためではないかと考える。彼の内なる女性人格要素の発現は，大別すると 2 つに分けて考えられる。ユング心理学の言葉を借りれば，ひとつはアニマ的なものであり，もう一つはグレートマザー的なものである。アニマの背後にはグレートマザーの力が働いているが，この論文では，マクドナルドのアニマ的なものを考察する。彼は問題をかかえた女の子の成長を描き，最後は結婚で終わるという物語の中で，女性要素と男性要素の結合による精神的な心の調和を求めていた。それは 19 世紀のイギリスの背景の中で衰退していたマクドナルド自身の女性原理を回復するものである。はじめにマクドナルドの生きた 19 世紀の背景を概観し，次に女性原理とアニマ像について概略を述べた後，本研究の目的のために彼の女性像がはっきり出ている 2 作品に絞って論じることにする。表面的には全く異なっていると見えるかもしれないが，

*　日本女子大学大学院 人間生活学研究科 人間発達学専攻（博士課程後期）
Division of Human Development, Graduate School of Human Life Science, Japan Women's University

これらの作品は，合理的な理性と非合理的な感情のバランスと結合の重要性をはっきりと示している。

1. 背　景

ジョージ・マクドナルドは，カルヴィニズムの優勢なスコットランド，ハイランド地方に生まれ，特にそのカルヴィニズムに心酔していた厳格な祖母の下で育った。母親は 8 歳の時に結核で亡くなっていた。祖母は予定説などによる厳しいカルヴァン主義の教理に従い，芸術的なものを嫌悪し，叔父のバイオリンを燃やすという極端な行動をしていた。しかし，一方では，ケルトキリスト教的な父親の影響もあり，ケルト神話や民話に親しみ，またグレンコーやカロデンの戦いに参加した先祖を持ち，ケルトの血脈を誇りにしていた。そのように相反する背景の中で成長したマクドナルドは，また急激に発展した科学に惹かれ，大学では物理学を専攻する。彼は科学万能主義の時代とも向き合っていたのである。

しかし，18 世紀半ばから 19 世紀にかけてのイギリスの科学と技術の発展は，それまで長い間，信仰されてきた宗教を弱体化し，精神的なものをどこに置いたら良いかわからない時代を創り出していた。ロマン主義のような自然や神秘主義的なものに惹かれる人々や，ケルト民話や北欧民話などが取り上げられるようにもなるが, 宗教は近代科学に置換され, 人々は合理主義的理性に支配されて精神とのバランスを失っていた。マクドナルドも例外ではなく，科学と宗教，そしてその信仰からくる父性的なものと母性的なものとの分離と統合の問題が，また理性と抑圧された感情のバランスをどうとるかが，彼の人生における課題でもあったのだ。

2. 女性原理の回復

マクドナルドの作品に現れるいくつかの女性像は, マクドナルドのアニマとして見ることが出来る。アニマとは男性の意識的な理性に対する無意識的な感情的側面を表す。

また C.G. ユングによれば，女性原理とは，情緒的思考，無意識を表し，男性原理とは論理思考，意識の状態を表す。男性もふつうは男性的要素ほど意識されていないが，女性的な心の要素をもっているのであって，これをユングはアニマと名付けたのである[1)]。

以下の章において最もマクドナルドのアニマ像を表現していると思われる『かるいお姫様』（1864）のお姫さま（Princess）と『黄金の鍵』（1867）のタングル（Tangle）という女の子をマクドナルドのアニマ的な女性像の現れの一解釈として取り上げたい。マクドナルドは度々，女の子の苦難の物語を書く男性の作家であり，これには彼の女性的な側面の問題が投影されていると考えられる。「男性はアニマとともに感情や情緒的な面の強い自然のありようを抑圧していると云われるが」[2)]，マクドナルドは理性と感情のバランスを失っている自我意識を，なんとか無意識的情緒的な深層にもう一度つなごうとして彼の作品の中で試みているのではないだろうか。

また，M–L フォン・フランツは「厳しい父権制の伝統にたつキリスト教文化には，女性の宗教的象徴が欠けている。マリア崇拝はこの女性像の欠如に対する十分な代替物であるとは言えない。」[3)] と述べている。聖マリアは光の部分のみを現し，影の部分は魔女というものに押し込まれなければならなかったのだ。マクドナルドは物語の中で，元型的登場人物や別世界を創り出し，そこでの出来事として，意識の世界から無意識の世界へと移行し，彼のアニマ像の成長を目指したのである。

3. かるいお姫さま

『かるいお姫さま』の出だしは，昔話の常套手段である悪い魔女が洗礼式に招待されなかったことに腹を立てて，生まれたばかりの女の子に魔法をかけるところから始まる。魔女の名はメイケムノイツ王女といい王様の姉であった。光の部分を表す王に対し，姉であるこの王女は影の部分を現している。ここでメイケムノイツは，100 年の眠りではなく，生まれたばかりのお姫さまの身体の重力（gravity）を取り去ってしまう。マクドナルドは，‘gravity’ という言葉の 2 つの意味である「重力」と「真面目さ」の両方の意味を使っており，お姫さまは体の重さとともに頭の中身も軽くなってしまい，軽薄で真面目さのない心の成長を奪われた状態で成長する。やがてお姫さまは 17 歳になり，背丈はすらりと高く美しいが，どんな不幸なことも笑い飛ばしてしまう感情の持ち主として成長するのである。

When she was told, for the sake of experiment, that General Clanrunfort was cut to pieces with all his troops, she laughed; when she heard that the enemy was on his way to besiege her papa's capital, she laughed hugely; but when she was told that the city would certainly be abandoned to the mercy of the enemy's soldiery—why, then she laughed immoderately. [4)]

お姫さまは将軍とその軍隊が残らず八つ裂きにされたといっても笑ってばかりいたというように，悲しい話を聞いても，また王様に鞭で打たれてみても一滴の涙を流すことも出来ず，人の気持ちをまるで理解することができない。これはお姫さまの心が干上がっている状態と言え，彼女は感情を持たない無味乾燥な人生を歩んでいたのである。そこへ王子が登場する。これも昔話の常套手段であるが，かれは森へ迷い込み家来たちから引き離されて，何日か孤独の中を彷徨う。森は未知の無意識の世界を象徴しており，王子が森で迷子になったということは無意識の深みにはまった状態であり，意識世界から無意識の状態への移行とも云える。そこでようやく王子はアニマであるお姫さまと出会えるのであるが，彼のアニマであるお姫さまは心が干上がっているのである。それは著者の代替である王子のアニマが死にかけていることを示唆していた。

フォン・フランツは，「斥けられ誤解された女性の物語が描くものは，合理主義的，父権制的に教育された男性が自身のうちでいつもは否定し抑圧しているアニマ像の運命にほかならない。」[5)] と述べているが，重力を持たず，泣くこともできないかるいお姫さまは，マクドナルドの抑圧されたアニマ像であるといえる。お姫さまは湖の水の中に居るときだけは重さも戻り，思慮深さを少し取り戻せるのであるが，この乾燥と対極にある水の持つメタファーを考えると興味深い。水は大地母神とほとんどの母神の象徴である。また，精神的再生と新生をも表す[6)]。しかしながら，湖の水は段々と減っていき，お姫さまはやつれていく。「どうやらお姫さまの命は，湖と深くつながっているらしく，湖の水かさがどんどん減るとそれにつれてお姫さまもどんどんやつれていき，湖がなくなったが最後お姫さまは生きてはいけない」[7)] ことが判明する。これはお姫さまが水の中で楽しく過ごしていることに腹を立てた魔女メイケムノイツがさらに復讐として干し殺そうとするものであった。王子とお姫さまは悪い魔女によって，もっと困難に向かい合わなければならないようになっている。魔女は干からびた蛇に水を吸わせ湖の底に穴を開けるのである。この魔女はお姫さまから水の持つ精神的な再生と新生の力を遮り，アニマの成長を押しとどめ，さらには殺そうとするのである。王子は王女のために自らが穴を塞ぐ人柱となることを申し出る。しかしお姫さまは犠牲になるのが王子だということが分かっていても，それに対してお礼を言おうなどとは思いつきもしないし平気なのであった。それほどアニマであるお姫さまの心は渇いていたのである。水かさが増してくる中，王子は歌を歌う。

Let, I pray, one thought of me
「ああ，いつか小さな泉となって，
Spring, a little well, in thee;
君の心の隅によみがえることが出来たら，
Lest thy loveless soul be found
愛のないその魂の
Like a dry and thirsty ground. [8)]
渇き干からびたその片隅に [9)]

王子でもある著者の心は，自分のアニマである魂が渇き干からびていることに気づいているのである。王子に請われるまま，お姫さまは手ずから葡萄酒とビスケットを食べさせる。この行為は宗教的な意味合いがあると思うが，マクドナルドは王子のために神の贖いを求めているように見える。お姫さまは王子に食べさせることを何度かするうちに，自己犠牲による王子の無償の愛に気づき始めるのである。お姫さまの渇いた心に水の再生が少しずつしみ込んでいく。そして王子の口元まで水かさが増したとき，事態は急激に反転する。お姫さま自らが王子を助けるために水に飛び込み死にかけていた王子を救うのである。そして王子の目が開いたとき，お姫さまは初めてわっと泣き出し，生まれてからずっとせき止められていたその涙は止めどもなく流れ続けた。それは干からびたアニマが急激に感情を取り戻したということではないだろうか。同時にこの国でも初めて見るような雨が降ってきて，湖は満々と水をたたえることが出来た。死にかけていたものは王子だけではなく，著者のアニマである魂でもあった。

アニマに無償の愛を捧げたために，彼は抑圧されていた感受性を取り戻し，分断されていた感情と理性のバランスを取り戻したのである。その結果として泣き続けたお姫さまには重さができ，重力の呪いから解き放たれたのであった。王子でもある著者のアニマは正常な女性的要素を取り戻し，彼らの結婚という結合で大団円となる。

エンマ・ユングは，その著書の中で[10]，科学と技術の時代に理性が分断した力のおそろしい効力に警鐘を鳴らし，理性と感情の結合の力が，その倍も要求されていると力説する。マクドナルドは物語を紡ぐことで，彼のアニマであるお姫さまの成長を助け，最後に結婚で終わる物語の中で，男性的な要素と女性的な要素のバランスのとれた結合を見届けることができたのである。

4.『黄金の鍵』

次にもうひとつの男の子と女の子の話『黄金の鍵』（1867）を見てみたいと思う。主人公の女の子はタングル（Tangle）といい，男の子はモッシー（Mossy）と言った。この物語もおとぎ話風に始まり，二人ともそれぞれが深い森の中へ入る。モッシーはすぐに黄金の鍵を見つけることが出来，「虹の橋」というはっきりとした目的をもって，森の奥に見えていた虹の橋へたどり着こうとする。モッシーは賢く，マクドナルドの理性の象徴だと考えられる。一方，タングルの方は，妖精に追われるようにして森へ迷い込むのである。タングルという名前は，髪の毛がもつれた状態を言い，だらしのない手伝いによって面倒を見てもらえない姿をしていた。ここにタングルの役割が，マクドナルドのもつれた感情によって，成長を阻害されているアニマ像だと見ることができる。物語は森という無意識の深層世界の中へといざなわれていく。タングルは飛行魚という妖精に助けられて，グランドマザーの家にたどり着く。タングルはグランドマザーによって，美しい深い水槽の中へ入れられ，魚たちにきれいに洗ってもらう。タングルは素直にその指示に従うのであった。それは成長を妨げられているマクドナルドのアニマが，グランドマザーという地母神の自然に触れて再生しようとしている姿でもある。ここでも水というメタファーのもつ精神的再生と新生が行われ，タングルという女性的要素は成長を遂げるのである。その結果，タングルは森の動物たちの話していることが理解できるまでになる。そこへ遅れてモッシーが黄金の鍵をもったままその家に入ってくるが，グランドマザーは成長したタングルと共に二人を再び森の中へ送り出すのである。これはマクドナルドが，理性と成長したアニマの感情を持つことが出来るようになり，彼の自我意識の成長とバランスが取れた状態を意味するのではないかと思う。再び 2 人は森の中を歩きながら空高く見える「影の落ちてくる元の国」にあこがれ，長い旅を続けるが，ここでも象徴的に，突然にタングルはモッシーとはぐれてしまう。

このマクドナルドの女性像タングルは，北欧民話の収集家アスビョルセンの『太陽の東月の西』（1958）[11] の中のむすめのように，独り苦難の道を歩かなければならない。北欧民話の中では，むすめは王子を探して森の中を彷徨い，3 人の魔女と出会う。むすめは「太陽の東月の西」へ行く道をたずねるが，初めの魔女から次のおばあさんの所へ行ってごらんと言われ，贈り物をもらって馬を貸してもらう。長い旅を続けてつぎのおばあさんに出会うが，彼女からも次のおばあさんなら知っているからといわれ，また贈り物と馬を借りて，長い間旅を続けて次のおばあさんの所へたどり着く。結局，また長い旅を続けてようやく「太陽の東月の西」のお城にたどりつき，むすめは苦難の道の末，禁忌を乗り越え王子と結婚して幸せに暮らすのである。この援助者の 3 人の魔女は北欧神話のノルンとしてよく知られている者たちである。一方，『黄金の鍵』のタングルもようやく飛行精となった魚に再び助けられ，海辺へたどり着く。そこでタングルは海の老人と出会い「影の落ちてくるもとの国」への行き方を尋ねるが知らないと言われる。そして彼に用意された白い花の咲く浴槽に横たわる。しばしの眠りにつくのだが，ここでタングルが死を味わったことが分かる。しかし彼女はその後も階段を下へ下へと下り，今度は大地の老人と出会う。彼も「影の落ちてくるもとの国」への行き方を知らなかった。タングルはまた教えてもらった階段のない流れの中へ下へ下へとすべっていかなければならなかった。そして燃えるように熱い道をこれ以上耐えられなくなるまで歩き続けると，ようやく裸の子どもと出会うことができる。タングルは，彼の遊びを見ているうちに彼女の精神の中に知性が芽生えてくるのであった。このようにマクドナルドは意識的に援助者である 3 人の魔

女の役割を，「海の老人」，「大地の老人」，「火の老人」という 3 人の男性性に置き換えている。タングルというアニマ像への援助と成長のために，魔女である女性的なものに代わり，男性的なものを用いているのである。これはマクドナルドがキリスト教文化の父性的なものを意識したからであると考える。アニマの援助者として母性的なものではなく，父性的なものにしたのは，マクドナルドが牧師としての説教壇から降りて，文学者としての布教を考え創作した物語であったからである。昔話のもつ象徴性をキリスト教的な象徴性に変更することで，信仰に対するマクドナルド自身の無意識からの感情につじつまを合わせようとしたものだと思われる。しかしそれこそが，マクドナルドの女性原理の回復の妨げになっていたのではないだろうか。しかしともあれこの物語の中のタングルというマクドナルドのアニマ像は彼らの導きにより成長を遂げ，モッシーとタングルの象徴的な結合により，理性と感情という男性的な要素と女性的な要素のバランスを取ることができた。マクドナルドはこの物語をつむぐことによって，論理的思考とともに情緒的思考を成長させたのである。

おわりに

このようにマクドナルドは女性的イメージのアニマの現れと成長を人間の心の深層構造をもつ昔話を下敷きにして，彼独自の物語に仕立てた。その元型的アニマの働きによって 19 世紀の科学万能時代の男性的要素の大きな優位から心のバランスを保とうとした。上記で取り上げた『かるいお姫さま』と『黄金の鍵』の物語は，どちらもマクドナルドの女性像であるアニマの回復の物語として読むことができる。合理的な理性に支配された時代のはざまの中でマクドナルドもまた非合理的な女性的要素との接触を失っていた。彼は無意識な層からくる女性像をはっきりと意識に上らせるために物語の中に組み込み，理性と感情の結合による調和をはかったのである。それは厳格なカルヴァン主義の下で育ち，科学万能時代を生き抜いていたマクドナルドの自我の完成に必要なものであった。そしてさらに理性と感情が統合された自我の完成は，彼の人生の究極の目的である「影の落ちてくるもとの国」へ行くという自己実現を成就するために必要な課題であったのである。

〔要　約〕

ジョージ・マクドナルド（George MacDonald, 1824–1905）のファンタジー作品には，王女が王子と試練の末に結ばれるというおとぎ話を下敷きにした物語があり，また女神的なものや魔女のようなものも登場するが，主人公を助けるものとして，また試練を与えるものとして機能する。以上のようなマクドナルドの内的女性像を，ユング心理学の用語を借りるならば，アニマ的なものとグレートマザー的なものであると考える。本稿ではアニマ的な女性像を論じた。人生の最終目的である自我の完成による自己実現は，理性と感情の結合が必要であると言われる。マクドナルドは 19 世紀の男性的理性優位の時代の中で否定されてきた男性の中に存在する女性的な感情の成長を，彼の物語の中で完成させようとした。女性的人格アニマの表象である王女や女の子に焦点を当て，マクドナルドは自身のアニマ的女性像の成長を助け，男性的なものと女性的なものを融合し，真のアニマ，彼の魂と言える自我の完成と自己実現をめざしていたのである。

註

1） M.-L. フォン・フランツ，『メルヘンと女性心理』，海鳴社，東京，59（1979）
2） フランツ，6
3） フランツ，7
4） George MacDonald, *The Light Princess*, Coachwhip Publications, Pennsylvania, 285 (2008)
5） フランツ，5
6） アト・ド・フリース，『イメージシンボル辞典』，大修館書店，678（1974）
7） マクドナルド，75
8） MacDonald, 312
9） マクドナルド，97
10）エンマ・ユング，『内なる異性』，海鳴社，（1947）
11）アスビョルセン『太陽の東月の西』は，ノルウエーの民話として，ヨーロッパ中で評判となり，ジョージ・ダンセントによって 1859 年に英語に翻訳された。

引用文献

・ジョージ・マクドナルド，『かるいお姫さま』，岩波

少年文庫，（1995）
・ジョージ・マクドナルド，『黄金の鍵』，妖精文庫，（1977）
・アスビョルセン『太陽の東月の西』，岩波少年文庫，（1958）
・M.-L. フォン・フランツ，『メルヘンと女性心理』，海鳴社，（1979）
・M.-L. フォン・フランツ，『おとぎ話の心理学』，創元社，（1979）
・エンマ・ユング，『内なる異性』，海鳴社，（1947）